

泰緬鉄道の悲劇を演劇化

イギリス人捕虜

旧日本陸軍通訳

テにローマックスさん

ワキに永瀬隆さん

能楽仕立てミュージカル

マカレストター演劇大教授の演出で

「日本の能楽にも造詣の深い、アメリカ・ミネソタ州セントポールにあるマカレストター演劇芸術大学の大教授主任教授シアーズ・ハ・エルドリッジさんが五月に来倉、大島、旧日本陸軍通訳、永瀬隆さんのインタビューを行った。これは、同教授が泰緬鉄道にかかわる演劇の制作のために、脚本の細部にわたって真実を追求するため。」

脚色のため来倉

永瀬さんにインタビュー



同教授は、今春から、永瀬さんの著書「虎と十字架（英語版）」や、元英国陸軍主室通信隊少尉エリック・ローマックスさんの著書「ザ・レールウェイトマン」（95年エスクワイヤー誌ノンフィクション大賞受賞作）を読んで演劇化を計画。すでにシナリオは、第一、二幕はできており、今回の永瀬さんのインタビューと、引き続きタイ国を訪ね、舞台となった泰緬鉄道の現地調査を行い、年内に脚本を完成させ、来年四月下旬から五月上旬の上演に向けて準備がすすめられている。

その一環で、十月二十七日に来日、東京、京都で日本文化を研究したあと、五日に夫人を伴って倉敷入り。同日は西阿知町の藤原邸で茶の湯の接待を受けたあと、大島で長時間にわたって永瀬さんインタビュー。六日

美観地区など、秋の倉敷を探訪。七日に離日してタイを訪問、クワイ河鉄橋や永瀬さんが建立したクワイ河平和寺院などを訪ねる。

企図されている演劇は泰緬鉄道の所在地、カンチャナブリー県から引用「カンブリ」とされる見通しで、能楽に傾倒するエルドリッジ教授は、室町初期の能作者、世阿弥（一二六三—一四四三）の代表作の一つ「教盛」を参考に組み立てた、能仕立てのミュージカルを目指しており、シテにローマックスさん、ワキに永瀬さん、ワキツレに藤原佳子さんという。同教授が脚色・演出、出演は同大学生で、ローマックスさんと永瀬さんの二人の人生の旅路を劇化した作品。

は、夢をかなした中国人作曲者ジュン・インさんに依頼。これまで出来上がったシナリオを読んだ永瀬さんは「これまで、泰緬鉄道をテーマの場合、復讐劇が強調され、恨み節に終始していたが、この作品は、双方の戦後の後遺症である捕虜となつての苦悩、通訳の苦悩などなせ苦しんでいるのかの説明がよくできている。テーマは重いが、非常に真面目に取り組んでいて魂にふれるように描かれ外国人にも日本人にも分かり易い。現代人におけるメッセージとなるので……と話している。

第一幕は、カンチャナブリーの連合軍基地を舞台、第二幕は、五十年後の戦場に架ける橋を舞台。復讐の亡霊となっての登場からスタートする。今回の訪日で、再問を乞